
heart物語

木と蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

heart物語

【Nコード】

N3258B

【作者名】

木と蜜柑

【あらすじ】

人を愛すること、人に愛されることを忘れた女の子が、同姓を愛してしまう女の子と触れ合う中で、少しずつ、心を取り戻していく友情物語。（短編です）

一、（前書き）

このお話を読んで、気分を害される方がおられたら、申し訳ありません。しかし、作者は、世の中には、色々な愛の形があつていいと思います。そして、それを批判する権利は誰にもありません。これを読んで、同じ気持ちを抱いてくれる人が1人でも増えれば嬉しいなあと思います。これは、さまざまな愛の形を応援する物語です。

一、

「ねえねえ、聞いた？篠原雪美って、レズらしいで！」

「え、まじで！？」

「らしいで！それで、バスケ部の浅野と付き合ってたんねんて。」

「うそ、浅野と？」

「浅野ってそっちの趣味やっけ？」

「さあ……。でも、ちよつと男っぽいところあるもんな。」

「確かに！けど、キモいよな。女同士で何すんの、って感じでさく。」

別に誰がどうしようとか関係ない。ただ、面倒なことに関わりたくないだけ。

朝っぱらからこんな話をされる、篠原って子と浅野が少し気の毒な気もするけれど、私には全然関係ないこと。

私は、ぼんやりと教室の窓から外を眺めた。

3階の窓から見える景色は、11月ってこともあって、すっかり色褪せてきている。

もうすぐ冬がやってくる。

「なあなあ、ちよつとからかったれへん？」

「おっ、いいねえく。」

女の嫌がらせはつまらへん。彼女たちは、黒板に浅野と篠原の相合傘を大きく書いた。

傘の上のハートは赤のチョークで塗りつぶす。

一体、こんなことをして何が楽しいのか。

「あ！来た！」

ガラガラとドアが開いた途端、蜘蛛の子を散らしたようにそれぞれの席に着く。

入ってきたのは、篠原雪美、張本人やった。

「おはよう。」

しんと教室が静まりかえる。

「ねえ、浅野とどこまでいったの？」

突然口を開いたのは、サヤカやった。

クスクスとあちらこちらからの笑い声。

「どっちから告ったの？」

雪美は答えへんかった。

私はずっと窓の外をぼんやり眺めたままで、雪美の表情を見た訳ではないけれど、きっとひどく赤面しているに違いない。いや、怒っているのか。

でも、敢えて見ようとも思わへん。

私には関係ないし、関わりたくもない。

どうでもいい。

人が泣こうが笑おうが、何をしようが無関係。

人を理解しようとも、理解したいとも思わへん。

このときの私は、人を愛すること、人に愛されることを忘れていた。

二、

放課後の教室。

特に用がある訳でもないけれど、この静けさが好き。

誰もいないこの空間で、私は机に座って読書をするのが日課やった。

読書に没頭する間だけは、全てから逃避することができる。
ただそれだけの理由。

開け放った窓から、ひんやりとした風が入ってくる。

1人は別に寂しいなんて思ったことはない。

むしろ、1人の方が楽や。

人になんと言われようと、1人でいい。

人と馴れ合うのは好きじゃない。

自分を作ろうなんて思わへんし、作りたいとも思わへん。

誰も信じひんし、誰も信じたくない。

裏切られるのはご免や。

だから、私は1人でいい。

パタパタパタ・・・

廊下を走る軽い音が響く。

やがて、その足音は教室の前でピタと止まり、

ガラガラとドアが開かれる。

ハアハアという可愛らしい息遣い。

私はふと顔を上げる。

「あ、えと・・・。」

篠原雪美。

小さな体で長いウェーブがかった髪。
ピンクに染まった頬。

私は再び本に視線を落とす。

誰が来ようと関係ない。

「えと・・・。」

「何か忘れもんしたんやろ。入れば。」

相変わらず目線は本の活字を追っているけれど、教室の入り口からなかなか動こうとしない雪美が気になって、思わず言うてしもた。

おそろおそろ自分の机の中前に移動した雪美は、ごそごと机の中に手を入れてまさぐった。

でも、机の中は空洞の音。

どうやらお目当ての物が見つからない様子。

「あれっ、あれっ、ない・・・。」

困ったような声でとうとう、持っていた鞆を床に引っくり返して探す始末。

ああ、全然本に集中できひん。いい迷惑や。
はあ。

溜め息が思わず漏れる。

「騒がしい子やな、あんた・・・。何探してんねんな。」
本をパタリと閉じて、屈み込んで必死に探す雪美にやっと目を向ける。

「あのな、大事なキーホルダーがないねん。携帯につけとったんやけどな、知らんうちに千切れてしもてな……。」

何やこの子、今にも泣き出しそうやんか。眉毛が八の字になってしもとる。

「携帯？ そんなんどつか道で落としてしもてるんと違うか？」

何をそんなキーホルダー如きでそんな泣きそうにならなあかんねん。ほんまにこんな子の気持ちがわからへん。

「どうしよう……。」

言うてる間にボロボロ泣き出しよった。はあ。

「そんなに大事な物やったん？」

私は、仕方なく机から降りて、雪美の散らかした荷物の前まで来てやった。

雪美はこくこくと頷いている。

「一体なんやの？ どんなやつ？」

「ピンクでな、これくらいの丸い石やねん。」

それでな、そこにイニシャルが彫ってあるねん。」

ひつくひつくと肩を揺らしながら、雪美はキーホルダーの大きさを指で示した。

ちょうど、ビーダマぐらいの大きさか。

「きつとここには無いわ。他に心当たりないん？」

ふるふると首を横に振る。

「もしかしたら、校内でおとしてるんかもしれへんな。」

一緒に探したるわ。」

雪美は目を丸くしている。

「え、いいの？」

何でこうなってしまったんやろか。

ほんまは、こんな面倒臭いこと大嫌いやねんけど、横でピーピー泣かれたら、本にも集中でけへんし、しゃあないわ。

そんなこんなで、何でか、私は雪美とキーホルダー探しをするはめになってしまった。

雪美って、なんかようわからんやつ。

三

トイレの洗面台の下、私は雪美と一緒にになって、床にピンクの石が転がっていないか探してみる。でも、ここにも、どうやらそれらしき物はなさそうや。

「もしかして、流してもたつてこないよな・・・？」

私は、不吉なことを口にした。

雪美は真っ青になって便器の中をのぞきに行った。

もしかしたら、プカプカ浮いてるってことも、無くも無い。

「もしも便器ん中やったらどうするん？拾うん？」

思わずおえっとなりながら、私は雪美を見た。

「うん、拾う！」

たとえばどんなどころに落ちていようが、何が何でも必要らしい。

私には、それ程まで物に固執する気持ちが理解できへん。

私立の女子高やから、公立の高校よりも、まだトイレが綺麗でよかった。

私は、中学のときに、模試を受けに公立高校に行ったけれど、そこ
のトイレの汚くて臭いこと……。もしあんな所で探し物をする
となると、さすがに口で息するのもはばかられてしまう。

「やっぱりないわ……。トイレやないんかな……」

雪美は、髪を耳にかけながら、きよろきよろと周囲を見回した。

まだ、さっきの名残で、睫毛が濡れている。

「なあ、そのキーホルダーって、そんなに大事なん？」

気がつくど、ふっとそんなことを口走っていた。

雪美がこくこくと頷いた。

ほんまに迷惑なやつ。

廊下に置いていた荷物を持って、私と雪美は再び歩き始めた。雪美の視線は、やっぱり足元へいつていて、常にキーホルダーの姿を追い求めている。

並んでみると、この子はなんて小さい。そして、女の子らしい。

染髪は学則できつく禁止されてるのに、雪美の髪は亜麻色だった。

「篠原さんの髪って・・・」

「地毛やで。生まれつき色素薄いねん、うち。癖っ毛やしね。」

廊下の空気はひんやりと冷たくて、雪美の頬がますますピンクがかっている。

そうなんや、地毛なんか。

「大江さんの髪って、素敵だね。綺麗な黒色で真っ直ぐで。」

「シンプルやと言うてくれへんか。」

プツと雪美が吹き出した。

なんや、ころころと表情の変わる子や、どない接していいかわからへんわ。

これやらか人と話すのは好きやない。そう思って、私はまた口を閉じた。

「大江さんって、いつも放課後教室で本読んでるん？」

私は敢えて返事をしてやらなかった。

色々と質問されたら鬱陶しい。

「大江さんて、無口？」

ただ、人と馴れ合うのが嫌いなだけや。

「もしかして、うちのこと嫌いなん？」

だんだん声のトーンが下がってくる。

ひよっとしたら、また泣き出すんと違うか。

体育館の裏。

黙ったまま、雪美が木材の隅やら地面の上を探し始めた。
なんでこんなとこに来たんや。
こんなところ、普段滅多に来ることあらへんやろうに。

「なんでこんなとこに来たん？」

雪美は懸命に探している。

「うん、ちよつとな・・・。」

わいわいわい、と体育館から声が近付いてくる。

騒がしい声がぼったりと止んだかと思ったら、私と雪美の目の前に姿を現した。

汗をじつとりと掻いた、バスケット部員4人。

女子と言えども、4人とも170センチ近くあり、ちよつと見上げてしまう。

肩からタオルをかけて、はたとこちらを見つめている。

「雪美・・・、こんなとこで何してるん？」

ボーイッシュで髪をショートにした子が口を開く。

雪美も、あつというような顔で顔を擡げた。

「優ちゃん！えつと・・・。」

雪美が何やらあたふたしている間にも、その子が眉間に皺を寄せながら、私と雪美を見下したような目で見比べている。

「お前、もうここ来んなって言ったやろ？皆に誤解されたらこっちが迷惑やねん。」

声を荒げながら、言った。

後ろの3人が、ぽんぽんとその子を宥めている。

「もう来んな。ってか、二度と話しかけんという。気持ち悪いねん！」

そう言って、くると向きを変えると、バタバタと体育館の方へと走って行ってしまった。

浅野 優。

C組の宝塚。

今朝の、クラスの噂を聞いていなかった訳ではない。

ぽつりと取り残された雪美の小さい背中。

小刻みに震えている。

2人に何があったのか、全然興味はないし、私には関係ない。
誰が泣こうが笑おうがどうだっていい。
巻き込まれるのはご免や。

そのとき、ピカリと何やら視界の端っこに光るもんが入った。
ちょうど、西日で反射して、草陰の中でチカチカ光っている。
手にとってみる。

ピンクの丸い石。

Y・A・とイニシャルが彫られている。

浅野 優。

私は咄嗟に、ポケットにそれをつっ込んだ。

四、

3年前の夏、父親の福岡への転勤が突然決まった。

母親はまだ小学校低学年の弟に1日の大半を費やす始末。

そういうのも、弟が生まれつき、脳に重い障害を負っていたからや。

弟が生まれてから、私は、ほとんど母親から相手にしてもらえなくなっただけ。

テストで頑張っても頑張らなくても、

褒められたり叱られたりすることもなく

学校での楽しかったこと、悲しかったことを聞いてもらってもない。私が少しずつクラスでも壁を作るようになったのも、この頃からや。

唯一、休みの日なんかは父親と話す機会があったけど、単身赴任となると、その、唯一の相手も身近におらへんようになった。

クリスマスはもちろん、うちにはサンタも来やんし、時間が無かったんやろうけど、母親にぺっと5000円札をそのまま貰うだけ。

誕生日も、お雛さんも、うちにはそれといった特別イベントは何もあらへんかった。

誰も、私の存在を気にした様子もない。

そういう中で育ったせいかな、

何でか1人でおる方が気が落ち着くねん。

無理に会話を合わす必要なんかないし、

嫌われたくない、なんていう阿呆な感情に支配されることもないし。人を信じたり、疑ったり、

なんていうか、面倒くさいことばかりやし、
所詮世の中は。

そんなことを思いながら、私はポケットの中のピンクの石を指先で触った。

ざらざらとした感触。

これ、絶対安物やわ。

「今日は、一緒に探してくれてありがとう。」

雪美が、白いセーターの袖で、目を擦りながら言った。

「ええよ。別に。」

ぶっきら棒な私の声。いつから、こんな感情のない話し方しかできへんようになったんやろか。

「篠原さんてさ、浅野さんと付き合ってたん？」

何を口走ってるのか。

他人の事なんかに関心突っ込んだら、碌な事ないのに。

「あ、うん。1ヶ月くらい前に別れたけどな。」

雪美は、驚く程あっさりと答えた。

指先に、あのピンクの石が触れる。

「皆にバレてしもてな、優ちゃんが、皆に変な目で見られるの嫌やねんて。」

くすっと笑った雪美の頬を、つうと一筋の涙が伝った。

「まだ好きなん？」

「ううん、もう好きやないよ。」

それは嘘や。ほんなら、何でこんなところに、キーホルダー落とすねん。

しょっちゅうここに来てこっそり浅野の姿見に来てたんやろう。

体育館の裏の窓から、少しだけやけど、中が見えるのは、私でも知っている。

「それは良かった。」

人を好きになる気持ちは私には解らへん。でも、好きにならへんっていうこと程無難なことはあらへん。

「じゃあ、私はもう帰るから。

あんたも暗くならんうちに帰りや。」

私は、雪美と目を合わせることなく、その場を後にした。
どうでもいい、人の事なんか。

五、

その晩、私はなかなか眠りにつかれへんかった。

制服のポケットに入れた、あのキーホルダーの石が気になって仕方なかったからや。

雪美が、無くして泣いてしまう程、大切にしていた物。

それほどあの浅野とかいう子のことが好きやということなんかもしれへん。

ふと、ふんわりとした柔らかい雪美の髪を思い出した。

あかん、寝れん。

私は、さっとジーンズに着替えると、こっそり家を抜け出した。時間は、11時半を少し回ったところ。

コンビニにでも行って、あったかい飲み物でも買ってくるか。

そう思った矢先、通りがかった公園のブランコで、うちの制服を来た子がぶらぶらしとる。

人のことはどうでもええんやけど、

時間が時間だけに、どうも気になる。

目を凝らして見ると、あれは、雪美や。

「篠原さん！」

気付いたときには、雪美めがけて走っている自分がいた。

「お、大江さん・・・？」

驚いた顔で振り向いた雪美の頬は、林檎みたいに真っ赤や。

夜になると、結構冷え込むもんやから、きっと身体が冷え切っているに違いない。

「あんた、こんなところで何してるん？」

「何してるって・・・、ブランコ乗ってるねん。」

ぱっと目を逸らして、雪美が俯いた。

「そんなん見たら分かるわ。私が聞いてんのは、あの後家帰らへんかったんかってことや。」

自分でもびっくりする程、声が怒気を帯びている。

雪美が、潤んだ目で見上げる。

はあ、また泣く。

「大江さん、怒ってる・・・？」

「そりゃ怒るわ！女の子がこんなところ1人でおったら危ないやろ？」

「大江さんかて、1人でおるやん。」

「わ、私はええねん。もともと1人やし。」

ぷつと吹き出す雪美。

本当に、この子には振り回されて、調子が狂う。

「もしかして、これ探してたんちゃう？」

私は、ジーンズのポケットをこそごと弄った。

「え、これ・・・。」

びっくりする雪美。

私を取り出したピンクの石に、目を丸くしてる。

「これな、今日あんたと探してるときに、体育館の裏で見つけたんや。」

家を出る前、制服のポケットからジーンズのポケットに移してそのまま持ってきてしまったんや。

「ああ、よかった……。ありがとう、ありがとう……。」

雪美は、それを受け取ると、ぎゅっと大切そうに握り締めた。

「ほんまはまだ好きなんやろ？」

なんでこんな面倒臭いの、人を好きになったりするんや、到底私には理解できへん。

「ううん、これはな、優ちゃんと初めて友達になったときに交換したもんやねん。」

今は、もう恋人やないけど、優ちゃんとはずっと友達やから……。」

友達。

あれだけ冷たい態度とられても、この子はまだあの浅野って子を友達と思ってるんか。

変わった子。

けど、見つけてすぐに、渡してあげたら良かったかもな……。そしたら、こんなところで面倒臭い会話せんでもすんでたかもしれないのに。

「なあなあ、美也ちゃんて呼んでもいい??？」

何を言い出すか、この子は。

「その代わり、うちのことは雪美でいいからさ。」

ほんまに、理解できへん、この子は。

「なんでも構わへんから、はよ家帰るで。家どこ？送ったるから。」

けど、なんでか雪美に関わってしまう自分。

なんでやろ。

ほんまは、ずっと、待ってたんかもしれへん。

ずっと、ずっと、自分の存在に気付いてくれる人を、待ってたんかもしれへん。

「なあ、美也ちゃん、手つないでもいい？」

何を言い出すか、この子は。

雪美は、私が何も言わへんかったら、勝手に左手を握ってきた。

ひやっと冷たい手。

前を向いたまま、嬉しそうに微笑む雪美の白くてちっちゃい顔。変な子。

私は、きゅっとその手を握り返した。

六、

教室のドアを開ける。

今日はなかなか寒い。

昨日の晩、雪美の家までの途中の道で、
雪美が言った言葉に驚いて、その後も眠れなかった。

なんや、あの子。

正直ようわからん。

「美也ちゃんが好き。」

その言葉がエンドレスに頭の中を木霊する。

そして、初めて、私は教室の空気がいつもと違うことに気がついた。

まだ授業も始まっていないというのに、全員席に着いてこっちを見ている。

にやけた顔つき。

ひそひそと話す声。

もしかして・・・。

黒板を見ると、大江と篠原の相合傘が。

やっぱりな。

「大人しそうな顔して、大江さん、体育館の裏で篠原さんとイチャイチャしててんて？」

サヤカが卑しいものでも見るような目つきで言った。

そやから、人と関わるんは嫌やねん。いらんことに巻き込まれる。

別に人に何を言われようと、知ったこっちゃない。

そんな嘘っぱち、言いたいだけ言わせといたる。

「浅野が言うてたよ？ 気持ち悪いもん見てしもたって。」

ブチンと何かが切れる音がした。

顔の筋肉がひくひくと痙攣しているのが分かる。

かあつと頭が熱くなって、気がついたらサヤカの襟首を掴んでいた。

「きゃああっ。」

「何も知らんくせに！ ええ加減にしいや！」

騒ぎに驚いて、他のクラスの野次馬が集まってきた。

拳を振り上げた瞬間、クラスの子がそれを止めに入る。

数人に押さえつけられながら、その隙間から、ちらりと浅野の姿が目に入ってくる。

掴まれた腕を無理やり払うと、私は浅野に突進していった。

「あんた！！」

思い切り平手で浅野の頬を打つ。

手の平がじんじん痛い。

浅野が頬を押さえたまましゃがみ込む。

「昨日はな、雪美はあんたに貰ったキーホルダーを体育館の裏で探してたんや。」

別に私とイチャイチャしてた訳やないわ、阿呆！」

浅野がきつと睨み返してくる。唇が切れて少し血が出ている。

「気持ち悪いんや、完全なストーカーやん。

だいたい、好きや好きやいうて女に付き纏われるアタシの気持ちにもなってみいや、迷惑極まりないねん！」

ほんまに阿呆や、こいつ。

雪美が、どんな気持ちであのキーホルダーを探してたか。

「違うわ！雪美はな、確かにちよっと普通の人と違うかもしれん。けどな、あんたとずっと友達や、そう思って必死に探してたんや。それでもあんたは気持ち悪いて言うんか！」

人に恨まれるのはご免や。

こんな騒動に巻き込まれるのもご免や。

けど、私の口は既に理性では止められへんかった。

「私はな、人を好きになったことも、好かれたこともないし、好きになる気持ちも何も解らへんけどな、

別にええやんか、誰を好きでも。人を純粹に好きになって何が悪いん？」

何が気持ち悪いん？

友達であれ、恋人であれ、家族であれ、何であれ、好きになる気持ちに間違いないかあるん？なあ・・・。」

気がつくと、視界が滲んでいた。

熱い物が込み上げて、顔中を濡らしていた。

あ。

雪美。

いつからそこにおったんや。

何泣いてるねん・・・。

雪美が淡い桜色のハンカチで顔を拭ってくれた。

ああ、そうか。

泣いているのは私か。

「ごめん、アタシが間違ってた・・・。」

浅野がポツリと言った。

誰かが、黒板の落書きを消している。

「美也ちゃん、ありがとう。」

うち、美也ちゃんが好きやで。優ちゃんと同じ位、好きやで。

そやから、いつも1人でおらんといて？

もっと皆で一緒に話そう？」

そうか、雪美は私のこと、解ってたんか・・・。

見回すと、皆も微笑んでる。

そうか、皆も私のこと、気付いてくれてたんか・・・。

私は、こくと頷いた。

人と関わるのって、そう悪くない。

人に好かれるのっても、そう悪くない。

そして、私はそのとき初めて、愛の存在に気付いたんや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3258b/>

heart物語

2010年10月10日05時42分発行